

Title	質問4 : 「カテゴリー」をめぐる問題について
Author(s)	六郷, 颯志
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2023, 5, p. 55-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90071
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

特集2 第7回臨床哲学フォーラム（シリーズ：ふるいにかけてられる声を聴く）
テーマ「研究者になるということ：研究者と当事者のあいだで」

質問4：「カテゴリー」をめぐる問題について

六郷 颯志

今回の臨床哲学フォーラムに際して『当事者は嘘をつく』を通読させていただきました。全体を通して、非常に多くの面で共感することができました。私自身も、研究という行為を自分の「闘い」だと看做している面が少なからずあります。また、フォーラムに向けて研究室で議論していく中で、「研究者」という他者の理解を期待しようとする立場と、「当事者」という他者の安易な理解を拒絶しようとする立場の陰影といったことにも気づくことができました。

誤解を恐れず言うならば、私が研究や学問に対して抱いている気持ちは小松原さんの志にとっても近いものだと思います（或いは、志をもって研究を行う、ということ自体に私は共感したのかもしれませんが）。しかし一方で、当然のことですが、ぴったりとは重ならず、私の中で問いとして浮上してくるポイントも幾つかありました。私の研究の基底を成すのもまた、私の世界観を一変させた特異点としての個人的経験です。しかし、まさに「個人的な経験」が問題であるが故に、その他の様々な点において私は小松原さんと異なる意見を抱き、時には激しく反発したのだと思います。今回はその中の一つについて質問させていただきます。それは、あるカテゴリーとしての、「支援者」という概念をめぐるものです。

小松原さんの「闘い」は、主に「支援者」に対して展開されています。父権的な「慈愛の精神」で支援を受ける人々の主体性を奪う「支援者」の存在は、性暴力の文脈に限らず、精神障害に関わる分野をはじめ、かなり多くの場所で長きに渡って「当事者」たちに認識されてきたものであると思われます。小松原さんの「支援者」に対する批判は、上のような意味において、広い意味での「ケア」の現場における共通の問題を浮き彫りにする指摘に他なりません。例えば、小松原さんの研究がうつ病を患う人のエンパワーメントになる場合もきつとあるだろう、と私は想像します。

ただ、一方で私は、「支援者」と「当事者」の対立構造を明確に打ち出していく議論の展開そのものに不安を感じてしまいます。私や私の家族にも、「支援者」という名で画一化され得る多くの人々との関わりがありました。しかし、彼らは私にとってはあくまで個別の人生を持った交換不可能な「個人」であり、彼らを何らかの共通項で括ることに私は抵抗を感じるのです。彼らとのあいだには、良い思い出も、苦い思い出も等しくありましたが、それはむしろ人と人が出会う場所で必然的に生じることではないでしょうか？言うまでもなく、小松原さんにとってそうした画一化は「闘い」のための一つの技法でもあると思います。し

かし、それでもなお私には、そこで何か損なわれるのではないかと思えてなりません。私がカテゴリーという概念にマイナスイメージを持つ原因は、私や私の友人たちが、いわば特定のカテゴリーに「随とされる」ことによって苦しめられてきた、ということにもあるのかもしれない。私の大学院での研究は、そうした苦しみの中にある人が、内面の探求を通して自己の経験のなかに個別性を越えた普遍性を見出していく過程を対象としています。自身に付与された「障害者」や「ひきこもり」といった画一のカテゴリーを脱ぎ捨て、時には文学や哲学、或いは研究といった先人の遺産を参照しながら、自らの人生に人間の普遍的な存在様式の一つとしての価値を見出していくことが一つの「救い」になるのだと私は信じています。私は、例えば小松原さんの「目に見えない連帯の糸」といった言葉に、上のような考えとの確かな接点を見出しました。ただ、その連帯の中に「支援者」たちの居場所がないということに私は納得できなかつたのです。

このような私の考えを踏まえて、小松原さんが「支援者」というカテゴリーを言説の中で用いることや、その具体的な対象となる人々についてどのような思いを抱いて研究に携わっておられるのかを教えてくださいたいと思います。また、特にその中で葛藤や悩みなどがあれば具体的に伺ってみたいです。

(ろくごう・そうし)